流　星　と　私

藪　　保　　男

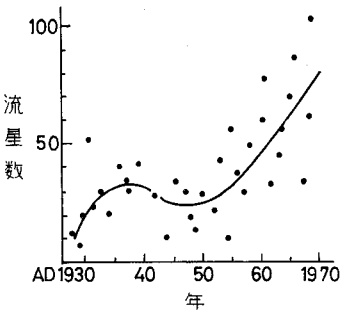
3 月中旬，日本天文学会から，故神田茂先生の基金にもとづく，神田記念賞を授与することが決った，という知らせをいただき，私は夢ではないかと驚きました．私は，いつそれに値するほどの仕事をしたのだろうか，暫くして，他の 8 名の方々のお名前を聞くにおよび，その方々の素晴しい業績に対し，私が選ばれたのはどうしてかとむしろ不安をさえ覚えるほどでした．しかし，やがて，今回の授賞は，小槇先生の身代りであるという結論に達し，しみじみと私の幸福を味わいました．

私の今日は，故小槇孝二郎先生なしには全く考えられません，先生は半世紀も前に，組織的な流星観測をはじめられ，東亜天文学会流星課長として，多くの観測者を育ててこられ，私も 1950 年から先生の指導を受けた門下生なのです．1969 年 5 月に急逝されるまで，先生にご厄介になりっぱなしの毎日でした．しかも今回，私は先生のおかげで，神田記念賞をいただく名誉を得ることができたのです．先生のお名前をはずかしめてはいけないという気持と，この私を推薦して下さった選考委員の先生方の期待に，せめて少しでも応えるように，今後努力しなければならないという責任を感じ，喜びと同時に身の引きしまる感動を覚えました．

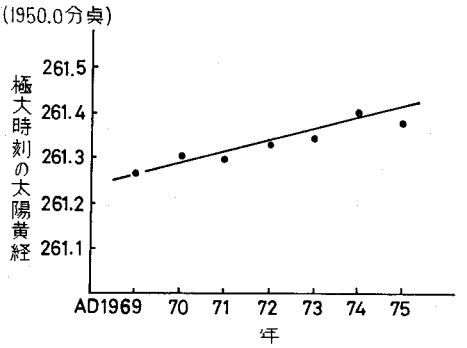
さて，日本のアマチュアの流星研究は，小槇先生を中心として，東亜天文学会流星課と共に歩み，1957 年には国際地球観測年に先だち，日本流星委員会が組織されました．1960 年代の後半からは，天文ブームと共に，流星観測者がどんどん増加し，東亜天文学会の流星課のみでは，せっかく得られた観測資料が，報告されなくて埋もれてしまう．なんとかして日本全体の観測資料を，一か所に集めることはできないものかと，当時の主だった活動家が集まり，多くの同好会流星課の連合体となるようなものをつくろうということになり，日本流星委員会を解消して，現在の日本流星研究会が誕生しました．時は 1968 年 5 月初代会長は小槇先生，副会長は村上忠敬先生と前川光先生，この時神田先生は顧問という立場で積極的にご意見をお聞かせ下さいました．そのほか，広瀬秀雄先生や村山定男先生からも，貴重なご意見をいただきました．小槇先生は，流星研究会発足わずか一年で他界され，2 代目会長は村上先生，副会長は長谷川一郎先生と小林弘忠先生，幹事長と観測部長が私という分担で現在に至っています．毎年夏に実施する流星会議は 17 回を数え，また地震研究所の長沢先生や，東京天文台の多くの専門の先生方のご援助を受け，本会の活動も，幸い順調に伸びております．

さて私自身の星とのかかわりは，1947 年（高校一年）頃から始まり，山本一清先生の初等天文学講話を何度も読み日本天文学会と東亜天文学会に入会しました．太陽黒点を観測したり，鏡を磨いたりしながら，1950 年 4 月に，故山本一清先生の田上天文台（現山本天文台）にご厄介になり，そこで初めて流星観測をやりました．以後 1961 年からは，竹内雄幸氏という素晴しい協力者を得，流星の同時観測を，1963 年からは流星の写真観測やスペクトル観測を，1967 年には大塚奨学金をいただき，流星の三色測光を，また近年ではFM電波を利用して，流星の電波観測にも手を出しています．しかし，私が初期から一貫して行っている観測は，流星の眼視観測で，特に流星群の極大時刻とその出現数の変化に興味を覚えてやっています．例えば，近年におけるふたご座流星群の極大時刻は，毎年 30 分ぐらいずつ遅れる傾向にあり，出現数も 1950 年頃に比べて，2 倍程度の増加を示しています．（グラフ参照）しし座流星群の変化も面白いですし，しぶんぎ群などは，思わぬ所で活発な出現を見せてくれることがあります．しかし，流星群や彗星の周期からみると，私達の観測の歴史は，全く浅いもので，永年変化をみるために，コンスタントな観測データーを積みあげていくのが，私達アマチュアの使命とも考えています．

毎日あらゆる階層の方々から，いろいろな質問や報告を受け，それ等の処理や会員から送られてくる資料の整理に，余暇の全てを費し，多忙な毎日ですが，それだけに生きがいを感じ，この授賞を機会に，一層頑張らねば，と決意を新たにしております．



ふたご群の極大期出現数の年変化



ふたご群の極大時刻の年変化